
零の錬金術師

黒崎しのぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零の錬金術師

【Nコード】

N9457Y

【作者名】

黒崎しのぶ

【あらすじ】

気づいたら、中將になつていて、軍の狗で、記憶がなくて……！？
生きながらもアメストリスの歴史に名を刻む、
天才錬金術師、「イリア・レッドスピア」に転生した！
漫画のことは覚えているのに、自分のことは何も覚えていないという体たらくさに
殺意を抱きながらも、大佐の子守をしたり、
鋼の錬金術師と鎧君にご飯作ってあげたりいろいろ大変な主人公が
苦しい言い訳でその場その場を一生懸命切りぬけていくお話。

第一話

「う…………ぐう……………」

目が覚めた。

「……………」

いやな夢を見た気がする。

自分が死ぬところを見たかもしれないし、他人が死ぬところを見たのかもしれない。

記憶をたどるが、手がかりになりそうな糸は全く見つからない。

『思い出せないからこそ悪夢』

誰かがそんなことを言っていた気がしなくもない。

そんなどうでもいいことを、起きたすぐに考えたせいか、

少し、というか、かなり頭が痛い。

とりあえず、何か食べようと思う。

何か、違う気がした。

ただの思い込みではなく、それは必然的に。

確かに、違っていた。

頭を押さえながら、天井に目をやる。

天井の色が、無機質な白だった。

とても感情なんてない（天井に感情なんてあるのか？）、無機質な白だった。

音楽でいうと、特に何もない、ただ、音が鳴っているだけの様なものの。

確か、私の部屋は、薄いレモン色だったと思うんだけど……

小さく、か弱くも、それなりの音楽は奏でていたはずだ。

いや、音楽なんて今はどうだっていい。

ここは確実に私の部屋ではない。

「……………」
「？」

私。

それは自分のことをさす言葉。

私。

私は、誰……………？

血が下がっていく気がした。それはもうストン、と。

思わず、口に手を添える。

私は誰？ここはどこ？

「記憶喪失……………！」

とりあえず、上半身を起こしてみた。

頭がククラするが、今はもう、大した問題ではない。

私はソファに寝ていたみたいだ。

革製の奴で、とても冷たく心地よい。

何かの部屋みたいだ。

真っ白な壁に、茶色のドアが、ひとつついている。

黒の仕事に使うようなデスクが一台置いてあり（ここは仕事部屋か？）、その後ろには

大きめの窓があり、そこからは、赤や黄色の落ち葉が散っているのが見えた。

大きな棚に仕事に使われるような資料がズラリと並べられている。

私は、部屋を一望する。

一通り見渡したところで、一度見た、資料の棚を、再び見る。

ん、ちょっとまで。『イシュヴァール』で書いてあるのは気のせい
か？

私は体を起こし、その資料を手にとってみる。

パラ……と音を立て、ページがめくれる。

「本物……」

これはハガレンじゃないですか!?(混乱中)

どうしよう、ていっかなぜ自分のことは覚えてないのに漫画のことは覚えてんのさ。

「とりあえず」

どうしようか。

顎に手を当てながら、探偵気分でそんなことを思っていると、

ドアがガチャリと音を立てて開く。

「……………!?!」

首がもげんばかりの勢いで振り向いた私に、ドアを開けた

金髪で、背筋がピシリと伸びた、見るからに完璧な雰囲気漂う美人さん……………

リザ・ホークアイは目を大きく見開く。

お互いに、お互いの行動が予想外だったため、数秒フリーズする。

私よりも早く現実に戻ったりザが、話しかける。

「どうされたのですか？ 中将」

……ここまで来て夢オチというのはただの逃げるため口実だよな。

まだ納得できていないような気もするが、しょうがない。

とりあえず、私は中将ということだよな。

ということはリザより上だよな、階級。

私は、なるべく平然を装い、苦笑いを浮かべる。

「いや、何でもない。それよりか、私はさっきまで何をしていた？」

第二話

「昨日は大佐のお仕事を徹夜でお手伝いされていたので、仮眠をとると、少し眠られていましたよ」

おおう、大佐のサボリ癖は健在か。

でも、もうちょっと情報がほしいな。

まだまだ足りなさすぎるんだが。

私は何気なく尋ねてみた。

「イシユヴァール殲滅戦って何年前だったっけか？」

「大丈夫ですか、中将。まだ少し眠られた方が……」

こいつってそんなに頭いいのか。

ちょっとしたきただけで、疲れているだなんて……

「あはは、ちよつと忘れちゃって……」

頭を掻きながらデスクに座り、足を組む。

するとリザがコーヒーを出してくる。

ちやつちやつと慣れた手つきでコーヒーを入れるリザ。

こんな家庭的な軍人、なかなかいないと思うよ。

「イシユヴァール戦は、今から10年前ですよ」

「ふむ、そしたら……」

さっきの資料を手に取り、再び読む。

私は集中し始めたら、周りのことが見えなくなるようだ。

リザもそのことが分かっているのか、何も話しかけてこなかった。

もつとも、今考えているのは、原作のことだが。

原作開始のときは、イシユヴァール殲滅戦は、13年前って言うってたよな。

じゃあ、原作開始はあと3年後か……。

「……………」

それまでに軍になじめたらいいな。

私は、窓から景色を眺めながら、そんなことを思っていた。

第二話（後書き）

第三話

「ふう……………」

ため息をひとつつき、読んでいた資料を適当に置く。

『イシュヴァール殲滅戦』

ある軍将校が、イシュヴァール人の女の子を撃ち殺したのが発端。
イシュヴァール人が、内乱を起こした。

イシュヴァールの英雄には、私の顔写真が載っていた。
勿論、それなりに若かったが。

そして、私の名前が分かった。

『イリア・レッドスピア』

零の錬金術師という二つ名を持ち、18にして中将まで上り詰める。

二つ名の由来は、全ての常識を零に還し、零から創りだすと言われているため

空中で錬成陣を切るため、「空の支配者」とも呼ばれている。

「いやな事件だったな」

私がしんみりと呟くと、リザは苦笑いを浮かべながら

「そうですね」

とだけ返した。

『ある軍将校』って、エンヴィーだったよね。

あいつが始まりで、色んな人が、ウィンリィが苦しんで、悲しんで

……

罪のないイシュヴァール人が、沢山殺されて………！

大きく息を吸う。

「あーくそ、駄目だ！ちよっと外行ってくる！！」

ガタンッと音を立て、ドカドカ歩いてドアへ向かう。
開けて、外へ出ようとしたとき、リザから声がかかる。

「そのままいなくならないでくださいね」

かかった声は、どこか悲しげで、心配したようなものだった。

こいつ、前にそんなことした事があるのか？

私はそれに、片手をあげて答えた。

第三話（後書き）

いまだに原作キャラが、リザさんしか出ていないという……！

第四話

秋晴れの今日。

外に出た私は、そこら辺をブラブラ歩きながら、
今日あったことを整理していた。

まず、異世界トリップ

ハガレンの世界にトリップしたからには、死ぬ予定のヒューズさん
とか助けなきゃ。

次に、記憶喪失

漫画のこと以外何も覚えていない。
何で漫画だけ覚えてんだ、私。

最後に自分のこと

イリア・レッドスピアという人物だということを忘れてはいけない。

でも、本当のイリアさんはどこへ行ったんだろう。

向こうの世界の私になっていたり。

「……よし」

悩んでいてもしょうがない。

私は自分の頬を強くたたくと来た道に戻る。

本当に、今日はいい天気だ。

ハイキングとかにちょうど良さそう。

私は、鼻歌交じりに歩くのだった。

第四話（後書き）

はい、短すぎですね。分かってます。

第五話

「キヤアアアアア！！？」

賑わう街から突然の叫び声。

鼻歌を歌いながら帰路を歩んでいた私は、声がした方――後ろを急いで振り返る。

如何にも犯人な男が、

女性もののバックを片手に持ちながらこちらに向かって走ってきた。

「……………」

こっちに向かって。

「ってえええええ！？」

周りの人はいち早く犯人に気づいたらしく、近くには誰もいなかった。

た。

みなさん、分かってたなら教えてよ。

ちなみに今の恰好は、白のパーカーを着、その下に薄い水色のシャツ、

下は、ジーンズ生地のスニーカーを履いている。

つまり、言いたいのはこれだけ見れば、そこら辺にいるような、何の変哲もない

『ジョセイ』なのだ。

私が、軍人。ましてや零の錬金術師だとは誰も気づかないのさ！

「退け退けええええええええええ！」

バックを振り回しながら、叫びながら、走ってくる犯人。

その後ろで何か叫んでいる、被害者の女性。

周りの人間は、あっというような顔をし、慌てて飛び込んで来ようとしている人もいる。

それでも私は動かない。

この『イベント』が、楽しすぎて――――

思わず口角が上がる。

犯人はそれを見てたじろいだが、頭を振り、突っ込んできた。

頭の中に錬成陣が浮かぶ。

複雑な形だ。

これが、私の、イリア・レッドスピアとしての、零の錬金術師の初錬成――――

私は、空中で、両手を複雑に動かし、常人には見えない速さで陣をきる。

皆が、驚いたような顔をする。

私が、錬成陣を描き終わったとき――――

大きな錬成反応が、私を中心にして、街を光で覆った。

第五話（後書き）

実はイリア（主人公）

純粋な戦闘狂だったりします。

でもそれが原因で人殺ししたり、

闘ったりはしません。

売られたケンカは買ってやるみたいな感じです。

第六話（前書き）

この話は、エドワード・アルフォンス視点（いきなり変わったります）で
お送りいたします。

第六話

俺らが、喫茶店で呑気に昼飯を食っていたら、

まばゆい光が、一瞬あたりを覆う。

それは、ほんの一瞬の出来事。

俺は何が起こったかわからず、大きく目を見開いたまま固まっていた。

アルも、見たところ俺と同じ状態のようだ。

「に、兄さんっなんか光ったよね!？」

身を乗り出して言うアルの声に、俺はやっと現実に引き戻される。

「ああ、どこかで大きな錬成が……」

起こったんだ、そう言おうとした俺の言葉をさえぎり、誰かが叫ぶ。

「おい、皆聞けよ! 零の錬金術師が街で強盗捕まえたんだとよ!!」

零の錬金術師。

この国の者なら、否この国の者でなくても一度は耳にしたことのある言葉だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9457y/>

零の錬金術師

2011年11月30日18時38分発行